慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	J・キャデイ著『東南アジア史』
Sub Title	J.F. Cady : "Southeast Asia, 1964"
Author	松本, 三郎(Matsumoto, Saburō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1965
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.38, No.4 (1965. 4) ,p.103- 108
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19650415-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

John F. Cady:

Southeast Asia

Its Historical Development

xvii＋657p. 1964, McGraw-Hill Book Company

J・キャデイ著

『東南アジア史』

一　十六世紀に始まる西欧勢力の東南アジアへの到来は、東南アジア諸地域を初めて世界史に登場せしめることとなつたが、その地位はあくまで植民本国たる西欧先進国の客体たるに留まり、その自主的活動はもとより、東南アジア諸地域相互間の関係は、極めて制限されていた。このように、東南アジアが、英米仏蘭といつた多数の欧米列強によつて植民地化され、分割統治されていたことが、第二次大戦の終了まで、東南アジアに関する包括的、一般的研究書の生まれることを妨げていた主要な原因となつていた。東南アジアに関する研究もまた、各植民地を単位として分割的に行われるのが普通であつた。

第二次大戦後、東南アジアにおける欧米の植民地は新興国として次々に独立したが、それと同時に、従来存在した学問の世界における垣根も取り払われていつた。このような風潮のうちに、東南アジアに関する最初の概説的歴史書として、一九五四年ハリソン教授の《Brian Harrison; South-East Asia: A Short History》が現われ、次いで翌一九五五年には、ホール教授の大著《D. G. E. Hall; A History of South-East Asia》が出たのであつた。以上二著が比較的オーソドックスな歴史書であるのに対して、現代に力点をおき、戦後アメリカで目覚ましい発展を示してきた比較政治学的手法を取入れて、東南アジアの姿をパースペクティブに描き出そうとしたものに、ケーヒン教授編の《George M. Kahin (ed); Governments and Politics of Southeast Asia, 1959》がある。

さて、東南アジアに関する代表的総括書として、筆者は以上の三著を挙げたいが、昨一九六四年には、これらに匹敵する二冊の好著が世に出た。その一冊が、ここで紹介するキャディ教授の「東南アジア史」であり、他の一冊は、フィッシャー教授の《Charles A. Fisher; South-East Asia: A Social, Economic and Political Geography》である。

キャディ教授の東南アジアとの関係は、一九三五年ラングーン大学で歴史学の講義をした時に始まるが、以後三十年間一貫して東南アジアとの接触を保つてきた。一九四九年以来オハイオ大学の歴史学教授として講義を行つており、《The Roots of French Imperialism in Eastern Asia, 1954》や《A History of Modern Burma, 1958》の著者として既に著名である。

二　本書は六章から成り、第一章「環境 Setting」を除く五章が歴史的記述である。すなわち、第二章「初期諸王朝 Early Empires」、

第三章「近代への過渡期 Trandition to Modern Times」、第四章「ヨーロッパの商業支配 European Commercial Dominance」、第五章「経済開発の強化 Intensive Economic Development」、第六章「政治改革と民族主義者の復活 Political Reform and National Revival」である。先に挙げたホール教授は、東南アジア史を前ヨーロッパ時代、初期ヨーロッパ時代、ヨーロッパの領土拡張時代、民族主義とヨーロッパ支配への挑戦の時代に四大分したが、キャディ教授がその第一章を二つに分けて論述していることを除けば、両者の歴史時代区分には著しい差はないといえよう。

さて、著者は第一章で、東南アジアの地理的環境、人種構成を紹介し、二、三世紀頃の東南アジアの諸環境を叙述する。ここで特に著者が強調するのは、紀元前二世紀末における漢王朝によるヴィエトナム地方の併合にもかかわらず、中国南岸地方を中央政府が軽視したため、東南アジアに対する中国の影響力は比較的小さかったのに比して、ヒンヅー教或いは仏教という宗教を基盤にしたインドの文化的、政治的影響力は極めて大きかったことである。その際、当然提起されるヒンヅー教や仏教が果して土着の文化を圧倒してしまったのか、或は単に表面の一部に取りついたにすぎないのか、更にまた、インドからの政治的、文化的輸入は、以後の東南アジアの発展の基盤となりえたであろうか、といった疑問に対しては、都市と地方の間に、また知識人と非知識人との間には著しい相違があつたものの、一般的には、インド文化が、平和的非政治的な手段を通じて土着の伝統とうまく同化し、特に東南アジア各地の支配貴族に受入れられて、東南アジアの初期諸王朝成立の基盤となつたことを著者は認めている。

第二章は、二世紀から十三世紀頃までの東南アジア史上の諸王朝を中心とした政治史の記述である。歴史に現われた東南アジア最初の重要な国家は、いうまでもなく現在のカンボジアを中心に二世紀末から八世紀中葉にかけて栄えたフナン王国であるが、この王国をはじめとし、同じくインド文化の影響を強く受けたジャワのスリビジャヤ王国（七―十三世紀）、カンボジア王国（六―十五世紀）、ビルマのパガン王国（十一―十三世紀）等諸王朝の興亡が展開される。

第三章は、モンゴール、イスラム、ポルトガルという三つの外的衝撃による伝統的東南アジアの変容を中心に扱う。先ず、十三世紀末におけるモンゴールの東南アジアへの襲来は、スリビジャヤ王国を完全に解体し、そのインドネシア統一の夢を打破つたが、他方ではタイ族を南方に圧迫してインドシナ半島中央部にシャム王国を建設せしめた。特に、タイ、ヴィエトナム、ジャバ等諸民族意識を刺戟した影響の大きさに著者の注目が払われる。

イスラムの影響をもつとも大きく受けたのはインドネシアであつた。一四〇〇年代に入ると、明朝中国と西域イスラム世界間の通商交通は著しく増大したが、その中継地として栄えたマラッカ領主が回教徒に改宗したことは、イスラム教徒の商業上の優越性とその攻勢的性格と相俟つて、伝統的ヒンズー文化との交流の途絶えていたインドネシア全域が急速にイスラム圏化していくことを助けた。

モンゴール、イスラムに続き、東南アシアに対する第三の衝撃と

なつたのは、十六世紀に起つたポルトガル人の侵入であつた。一五一一年その商業的繁栄の最中に、マラッカは、イスラムに対する聖戦と貿易利潤の独占を目的としたポルトガルの冒険家達に占領され、ジャワ→インド→アラビア→ヴェニス経由でヨーロッパに運ばれていた香料貿易ルートは断絶された。ポルトガルによる香料貿易の独占は、ジャワやインドの多くの貿易業者を破産せしめたが、ポルトガル人による権力の濫用に対する反感は、皮肉にもキリスト教宣教師の努力にもかかわらず益々イスラム教徒を増大せしめる結果となつた。

さて第四章は、スペイン、オランダ、フランス、イギリスといつたヨーロッパ諸先進国が、その商業的利益を目指して東南アジアに殺到した時期すなわち十七世紀から十九世紀初めにかけてを対象とする。スペイン征服前のフィリピン諸島では、他の東南アジア諸国とは異り、中国、インド文化の影響は少なく、イスラムもミンダナオなど南部諸島に滲透していたに留まり、土着の政治制度、商慣習、宗教が支配的であつた。このため、初めてフィリピン全島を政治的に統合することに成功したスペインは、比較的容易にキリスト教を辺地にまで大規模に普及せしめることができた。また、北アメリカのスペイン領との貿易路の開通は、マニラを東洋における商業中心地の一つとして繁栄させたが、スペインの努力にもかかわらず全国的規模での経済発展には遂に成功しなかつた。

東南アジアにおけるポルトガルの貿易独占に最初に挑戦し、これにとつて代つたのはオランダである。著者によれば、オランダ商業帝国の特色は、ジャワに確固たる領土的基盤をもち、ここを中心に西はペルシア、インド、セイロンから東はモルッカ、中国、日本に至る巨大な貿易網を構築したことにあり、また、それが本質的に商企業主義であり、強奪でなく交換を目的としたことにあつた。

十七、八世紀のヴィエトナムが、或は南北に分れての、或はそれぞれの内部での激しい内戦で疲弊し、またその解決のためにグエン家がフランスの援助を借りたことは、この国にフランスの伝統的影響を導入することとなり、最終的には十九世紀末の仏領インドシナ建設への途を開いたが、これと全く対照的に、一六八〇年代に危くフランスの陰謀でその独立を危くしかけたシァムは、以後慎重に孤立主義の政策を守り、特に十九世紀に入つてからは、モンクート王、チュラロンコルン王等の有能な王が現われ、累卵の危きにあるシァムの独立を保持しえた。著者はこの点に特に興味を感じた様で、十八、九世紀のシァム政治史には多くのページをさいて論及している。

さて、インドにおける領土的支配を達成したイギリスは、一七八五年以後オランダ商業帝国の勢力を次第に駆逐し、東南アジアにおける通商上のヘゲモニーを確立した。このオランダからイギリスへの覇権の移行は、折からイギリス本国を中心に吹きまくつていた産業革命の嵐と相俟つて、従来の東方貿易の性格に著しい変容を与えた点で注目されねばならない。

次いで第五章は、いわゆる帝国主義時代に当る十九世紀中期から二十世紀初めを対象としている。この時期はいうまでもなく、新し

い経済的要求に基づいてヨーロッパ先進国の植民地支配が拡大強化された時代に当る。

著者によれば、一八二四年のシンガポール領有は、確かに東南アジアにおけるイギリスの勢力を著しく拡大したが、その真の重要性が認められたのは、一八七〇年代以後マレー半島における錫鉱とゴムの生産が商業上信じられぬ程の利潤をイギリスにもたらしてからのことで、その結果マレー半島諸州は次々とイギリスの支配下に入れられた。この時代イギリスの範囲に入つた今一つの重要な国はビルマである。三度にわたる英緬戦争の結果インド帝国の拡大という形でイギリスのビルマに対する支配権は確立されたが、このビルマ占領の動機は、セイロン、バルチスタン、ヒマラヤ国境地帯の場合と同様主としてインド帝国の安全のためであり、マレー半島におけるが如く経済的動機を第一義とするものではなかつた。

ヴィエトナムは、東南アジア主要国の中でヨーロッパの支配下に入つた最後の国である。それはまた十七世紀に初まる長いフランスとの関係のもたらした究極の姿でもあつたが、フランスの支配は更にラオス、カンボジアにも拡大され、重商主義的基盤に立つたフランスの経済的搾取が行われた。また仏領インドシナにおいてフランスのとつた同化政策は、注目すべき植民政策ではあつたが、原住民の間に奥深く入り込むことはできなかつた。

一八三〇年のベルギーの分離独立に象徴されるオランダ本国の財政的政治的困難は、ジャワにおけるオランダ統治方式にも重要な変更をもたらした。ジャワ外部のインドネシア島嶼部への領土的支配権の拡大とともに、悪名高き耕作制度 (culture system) の採用等によるジャワの農業的人的資源の組織的搾取が試みられた。耕作制度はやがて自由主義政策に戻されたが、十九世紀後半に始まつたゴム、錫、石油等に対する世界需要の急増は、蘭領インドに目覚ましい経済的発展をもたらし、第一次大戦中にそのピークに達した。しかしながら、その利益は原住民には殆ど還元されず、また、オランダの植民政策は、インド、ビルマ、フィリピン等近隣諸国で行われつつあつた自治政策に関心を示さなかつたので、伝統的原住民と近代化されたエリート・グループ双方の間に、政治的不安が徐々に醸成されていつた。

第六章は、第二次大戦後の独立への序曲をなす東南アジア現代史を扱う。フィリピンにおけるスペインからアメリカへの権力の移譲、アメリカの対フィリピン政策、ビルマにおける民族運動とイギリスの緩和政策、一九三〇年代以後のインドネシアにおける急進的民族主義とオランダの抑圧政策、ヴィエトナムにおけるフランス重商主義政策の展開と統治政策の強化、或はヴィエトナムにおける民族主義運動の開始と共産主義指導者の登場といつた問題が広く論じられている。

また著者は、一九四一年から四五年にかけての日本の東南アジア征服、占領について、それがこの地域の近代史における極めて重要な分水嶺をなすものであるとして次のように述べている。「〝アジア人のためのアジア〟をスローガンに、日本はそのアジアにおける指導性を運命的役割とみなし、東南アジア諸国民との宗教的、文化的

同一性を強調して、大東亜共栄圏の確立のための協力を原住民に求めたが、かれらはこれを拒絶した。それにも拘わらず、日本が東南アジアから駆逐された時、日本が戦時中刺戟した東南アジア諸国の民族主義は、再びヨーロッパの植民支配が復帰することを不可能にしていた。」

かくして、第二次大戦後東南アジアにおける重要な旧植民地は今日すべて独立の地位を獲得し、重要な歴史的発展を遂げてきているのであるが、著者はこの点については、その正しい評価には尚充分な時期が与えられねばならないとし、社会変動の性格、伝統の持続、歴史的対立の再現、新中国の影響、東南アジアの政治的将来等について簡単に触れるに留まっている。

三　アメリカの著名な東南アジア研究者ルシアン・パイ教授は、その書の冒頭で「東南アジアは、極めて多様性に富む。この地域の八つの主要国――インドネシア、フィリピン、ビルマ、マラヤ、タイ、ヴィエトナム、カンボジア、ラオス――は、それぞれ異る伝統を有し、しかもその各々が更に複雑な多様性をもつ。宗教、言語、習慣、歴史等すべての点において、どれ一つとして同質的国民は存在しない」(Lucian W. Pye; Southeast Asia, "Modern Political Systems: Asia", p. 297) と述べているが、その多様性については、東南アジア研究者が均しく認めてきたところである。

ただ本書の著者は、現在の東南アジアにおける多様性の歴史的背景を追求し、その多様性が東南アジアに固有のものであったのではなく、その多くが歴史的産物であったことを主張するのである。すなわち、著者の歴史的記述の背景には、《(1)東南アジアの多くの人々が、技術発展、耕作方法、宗教、社会政治制度等多くの点で共通性を有した伝統的土着文化の支配的な時代があり、(2)それに次いで、この類似性を補完するものとして、インド、中国、アラビア、ペルシア等から経済的、文化的影響を程度の差こそあれ均しく受けた時代があった。特に、土着文化の生存しつづけたフィリピンと、中国文化の影響の強かったヴィエトナムを除く多くの地方は、ヒンヅー文化の洗礼を受け共通の文化を有していた、(3)このように比較的同一性の強かった東南アジアに、近代は分裂的諸要因を紹介した、一四〇〇年以来のイスラムの侵略は、香料ルートに沿って新しい文化圏を生んだし、更にそれに続く西欧諸国の植民活動は――特に十九世紀以後の帝国主義時代に著しいが――東南アジア各地域間の相互関係を遮断し、そこに多数の重要な異質性を生ぜしめたのである、(4)第二次大戦後の東南アジアは、再び各地域間の相互関係を再確立する段階に来ているが、その必要性は、政治的不安定、経済的後進性からの脱却という共通の問題の解決という面からも強く要請されている》といった歴史観が強く流れているように思われる。

パイ教授もまた、東南アジアを四つの時代に分けて、伝統的東南アジア文化の時代、インド・中国文化の時代、西欧植民地時代、独立期としたが、本来政治学者である彼が、現代東南アジアを「多様性」の認識の上に立って解明しようとするのに対し、歴史学者であるキャディ教授は、「政治、文化、経済等の諸分野における現在の著しい不一致にもかかわらず、東南アジアに共通する経験、利害関

係、考え方等の類似性が、東南アジアの全歴史を通じて観察されうる」として、多様性の根抵に流れる同一性を歴史的に把握しようとしている点に、筆者は特に興味を感じるのである。

（松本三郎）

William H. Friedland & Carl G. Rosberg, Jr. (eds.): **African Socialism**
Stanford U. P., 1964, xi＋313pp.

W・H・フリードランド　C・G・ロスバーグ二世　共編
『アフリカ社会主義』

一　本書は、標題の示すごとく「アフリカ社会主義」に関する論文集である。

こんにち、非ヨーロッパ地域が世界の舞台へ主体的な役割をになつて登場し、現代史のホリゾンタルが急激に拡大したために、ヨーロッパ的現象のなかから抽象されたあらゆる社会科学概念および諸価値は、その適用可能性もしくは普遍性をめぐつてひとしく再検討をせまられているが、社会主義もまたその例外ではない。社会主義は、そもそも原初的には、高度に発展した資本主義の遺産である大規模な生産力を土台とし、生産の無政府性を除去しつつ分配の平等化を実現するための制度であつたが、それがロシア、中国等の比較的後進的な地域で実践化されるにあたつて、むしろ力点は、低水準にある生産力を高度化させるという側面に移行するにいたつている。いいかえれば、社会主義の現代的意義は、むしろ遅れた地域の工業化を急速におしすすめるためのテクニックとして効果的である、という側面にもつとも多くみとめられるのである。したがつて、工業化を中心的課題としてになつている現代低開発諸国の多くが、なんらかのかたちで「社会主義」的発展のコースをたどろうとしているのも、あながち不思議なことではない。

ところで、これらの低開発国社会主義は、その多くがヨーロッパ的社会主義のバリエーションと考えられるが、なかにはヨーロッパ社会主義の系列にまつたく属さない社会主義も存在する。本書のテーマであるアフリカ社会主義もそのひとつである。アフリカ社会主義は急速な工業化という実践的要請からうまれ、それをアフリカ的価値のうえに基礎づけたイデオロギーおよび運動であるとみなすことができる。それは部分的にはヨーロッパ社会主義の影響を受けているが、全体としては前述のように非ヨーロッパ的な性格をもつ社会主義である。

しかしなにぶんにもアフリカ社会主義は、単一の思想家によつて展開されたものでないだけにイデオロギー的統一性をいちじるしく欠いており、またごく最近にいたつて登場してきたものだけに極め